



玄同放言

卷四

15
231
4

8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6 7 8 9 100 1 2 3 4 5 6 7

○一

尼清圓

尼妙海

松村生

智昌院並真中氏

唐九光

天朝前後尚齒會

睢陽五老

孝英會十二老

第三十三 尼妙圓

附妙圓石地藏圖

第三十四 藤原經房

追加麻々局

第三十五 小松內大臣

平重衡並北條時賴
微行餘論附

第三十六 狄青錢卜

追加石川丈山

第三十七 渡汎達磨

附和漢智戰

第三十八 犬青錢卜

追加石川丈山

第三十九 藏法師

附水滸傳像贊

第四十 白幽子異傳

追加麻々局

第四十一 詰金聖歎

附東光寺蒲櫻

第四十二 別錄

前集補遺正譌

共二十八箇條

第二集三卷一十六編 附錄追攷正譌 共十二條 寫字二頁
畫圖五種其第二十九編以上於前集總目錄中可見也

玄同放言第二集目錄終

追加引書目錄

神皇正統紀

皇統紹運錄

公卿補任

江家次第

愚管鈔

賊盜律

日本逸史

中右記

聖德太子傳曆

古語拾遺

保曆間記

江濃記

落窠物語

將軍譜

東國太平記

今昔物語

本朝三國志

書言字考

鉢加通伎草紙

袋草子

奇異雜談集

老人雜話

古今著聞集

攝陽群談

宇比麻奈備

下學集

雪齋紀事

夜船閑話

雍州府志

父左牟須備

姓氏解

翁草

常山樓筆餘

好古日錄

其蜩菴杜口

四季草

畸人傳

櫻陰腐談

桂林漫錄

共二部

幸菴對話記

神社考

河社

東海談

念佛三心要集

今援鈔

桂林漫錄

仙鶴堂梓

古番謡

殺生石俊寛
白樂天共三本

酒顛童子繪卷

東岡舎遺稿

禮記

並大學

晋書

宋書

北史

隋書

宋史

孔子家語

列子

墨子

韓非子

楊子法言

博物志

劉向列仙傳

劉向說苑

穆天子傳

漢武內傳

阮籍莊論

袁中郎廣莊出祕笈

述異記

唐柳河東集一名柳文

枚古質疑

楚辭後語

氏族博考

宛委餘編出四部稿

列仙全傳

日知錄

智囊全集

西湖遊覽志

人海記

續文獻通考

清張庚國朝画徵錄

佛說仁王經

唐梵千字文

唐高僧傳

唐續高僧傳

宋高僧傳

祖庭事苑

無門閑

大智度論

僧祇律

三國志演義

順治版水滸傳

雍正版水滸傳

翻刻忠義水滸傳

智囊全集

水滸傳解

第二編抄譯
共二十二部

續文獻通考

通計一百八部

前集所錄引書一百九十部共二百九十八部

唐梵千字文

第廿九人事

姓名稱謂

水滸傳

荘土

龍澤解瑣吉甫著

水滸傳

玄同放言卷之三上第三本

水滸傳

水滸傳

近曾姓氏を略解せり。吉田兼右卿の官職難義より氏のよりあり。白石翁の人名考の訓詁の辨あり。安齋翁の秋草上より亦姓名の編あり。今古比差別を論じたり。この他宇野鼎俗字三平號明霞近江人。姓氏解丁名弁小ハ和漢の氏族と併論せり。異朝のよりやく精細あり。然し交朝の姓族と釋ゆ。漢のあらゆるせりのひがとば辭すも亦多き。かくればその言多き。訛謬少く。然その善よりぞく疎漏少く。かほ姓源を究ふ由から。余も亦前版燕石雜志。名字のよりと論じれども今ゆく思へば浅薄なり。且悞もるとなまよあらず。ゆゑに考證せり。前ゆもかどせらうと復つてしもふべくべく。

大朝の萬姓との淵源邈か。云々と神紀考る。或へ神號うやむろあら連宿等

或職官より來らるゝ。朝臣直・村主・便是事物紀原譯部。姓曰下
 通曆洎帝王五運歷年記人皇之後有五姓七姓十二姓紀
 則姓之始疑起於此氏族博考引通志曰得姓受氏有三十
 二類第一云云第二云云者亦此類也。がまどり唐山ハ秦漢以降
 その姓氏の奈れく本邦の姓族との義異形。天朝ハ中葉より姓族の
 制度損益あり。されどその唱を更々玉龜(天武天皇十三年冬十月詔)と
 三年冬十月君の姓を改く公とし。伊美吉を忌寸とし。光仁天皇の宝龜四年ア曾
 美を朝臣とし。文德天皇の齊衡三年又忌寸を改りく。伊美俊の姓を賜ふと
 云。今もなかやとの唱へ背ふ異あべくもあらず。古言を解こと容易かうね
 これと定る註をうりゆか。かと年来らひと潛め心をあくよ苦やく。との二
 三と考得す。書紀九・天武紀曰。十三年冬十月己卯朔詔曰。
 更改諸氏之族姓作八色姓以混天下萬姓一曰真人二曰
 朝臣三曰宿禰四曰忌寸五曰道師六曰臣七曰連八曰續
 仙鶴堂梓

置謹按ちるゝ真人トヒと賓賓此云未かくあれひとをまひやまとひハ辟の省立
 お取興賓天子之義以命之この故ニ諸王皇親からざりのやうこの姓
 賜。真入ハ萬姓の上首かれども後ニ朝臣の姓の殿がく累世執政小
 よ。遂ニ真人の上をあく。拾芥抄姓戸部ニ朝臣を第一。うつしく皇親諸王也。
 朝臣の姓を賜りて真人の姓ハ稀より。第二朝臣。大臣。阿曾美。
 玉加都麻。卷よ。かぞの朝臣。吾兄臣とひす。云云とひ。あもくあぐれ
 ども證文を引どひ。あくは贊美のと葉な。漢と訓。あくは大哉とおひ。文
 酉。朔。己卯。以武内宿。御大臣也。先朝。為棟梁。臣。是朝臣の姓源
 ある。何とあれば職より大臣。大連姓。大忌寸。大宿。御氏。や。大中臣。大神
 かど大字を被させ玉もあれど。貴姓の朝臣。大臣。大朝臣。紀。朝臣の朝。大の義

御とば。又前輩の説より、朝臣へ朝廷の臣とひよりやく。漢語よりゆき。後より和訓を
 つうじて、朝夕の意を借る。あさぢの反対。あそとよもじと。ひひと僻説なり。唐山老
 朝臣といふ。朝廷の臣とひより。朝臣のす。蔡邕獨斷。姓の朝臣へ彼義と異べ。此
 文字ハ漢の熟字を假す。もひよべ。あやと言語を宗とす。あよ。字義。因
 繩のひみを傳會か。又職の大臣へ。和名類聚鈔官職。又於保伊萬
 宇知伎美と訓。もひよべ。ある後世の唱が。和訓類林。於引皇極紀云。
 大臣。於良於美。玉加都麻。卷。やも亦云。大臣へ。意富於美と
 唱て。臣とふ。戸とふ。言を加へ。よかとまなびと。此云。
 頃計。か。何と。歌と。反け。やゑと。よかと。いふが如し。頃音が。て。
 ようて。そらゑと。そらひと。唱ふ。即ち。この姓源へ少彦名命。うやう。須久奈と
 輔佐の。うとくこと。通す。彦名ハ矮人也。矮人。比久野。人をかと。あらわし。大人をかと。飛
 ひ。如。この神は身體ひと細小。かくれば。高皇產靈神の指開く。漏墮玉ひ。

とぞひあ。神紀一書。の説なり。又少彦名命ハ大己貴尊を佐け。天下を經營。あらわす。輔佐矮人命と稱す。あらわ。亡友秀實が職官志を編。とひに屢々吾廬を訪。職名姓氏の事實を。どと討論せ。とあらわ。之のを。秀實が説よ宿祢ノ宿衛。おとねと横韻通す。後世侍従の官比。如。と。余これと否して。を。おとく漢語。古言よ叶ふべくも。やべ。猶考べ。と答へ。がくそ秀實没りて後。あらわの愚考を得。やべ。あと彼友の在。一日ふえと。示さう。うそ。らしく。遺憾と。せんぐ。秀實俗一字。伊三郎。號。修静菴。下野宇都宮人。嘗て業於同鄉石橋坊。著九志。未成。文化十年癸酉秋七月五日没。年四十七。葬于根津龍興山。臨江禪寺。所云九志者。神祇志。山陵志。姓族志。職官志。服章志。儀志。民志。刑志。兵志。是也。山陵志一卷。葬刺ス。於家。其他。稿本猶在。今不知。落。於何人之手。嗚呼。可惜焉。又前輩の説よ宿祢。宿尼。少名。おどり。うき。とのもの。定め。あらわと。おどり。宿祢。又足尾とも書。おどり。また。おれ輔佐の假名。あれ。異からべくもあらわ。おどり。宿祢。何のうき。解。ど。との人も。おどり。考。得。おどり。第五道師。

說苑辨刃篇
其在家則父
爲陽而子爲
陰其在國則
君爲陽而臣
爲陰。その義
ぢのうしり合ひ

家の如く大和画師。黃書画師。百濟画師。かの數姓あり。第六
臣オニハ字の如。君を祖と。臣を鬼と。きとがと通へ。きとひやとみと横音通へ。むと
あひ。むよへ陰と。蓋君臣尊卑の等あり。使主オニも亦同訓。あひ君臣佐使の意を
惜りく。使主と。即臣之訓。義ハ右全。第七連ムラシハ守護。守護。此モ里。大連も
大守なり。むともと通アリ。の反りそ。あひと。あひと。この姓源ハ大己貴神より也。大
己貴。又作。大物主。大國主。古事記。作。大汝。並。同訓。猶大連と。寫。あひと。大國主と書。こも假學
定年遅。萬葉集。作。大汝。並。同訓。この神。あひく。天下を。管領。あひ。うバ。大守の義。こよ。後世。親王の任國を大守と
唱ふ。諸臣の守たる。の。大字を冠。も。と。許。させ。せ。ハ。さ。う。を。職。これ。より由。ナ。リ。か。く。と。大
連ハ。その。仕重く。連ハ。その。姓高貴。よ。あ。ば。後世の制度。よ。國守。ハ。五位六位の人。え。れ。よ
任せ。も。と。す。り。と。も。と。又姓の連ハ。後。り。と。職の大連ハ。先。と。大連ハ。大己貴。よ。あ。れ。ど。も。と。まつ。と
の。と。あ。ば。連ハ。人。名。や。あ。天智紀。よ。大臣。少。我。臣。連子。あ。天武紀。よ。馬飼
部造連。あ。是。か。允恭天皇の御宇。よ。以来。數朝。大臣と大連を。執政の

美稱ひきはあくまつもあつ。連れんとのものべ。守護の義ぎ。大連だいれんと同うべ。この故ゆゑ。天武あまむらノ制せい連れんの姓성ハ廻まわ宿しゆ祢みの下げす。大已貴少彦名おほいかひこひなを姓源せいげんとせば連れんの姓성ハ宿しゆ祢みの上じやうす。爰あそ理りありよ。そのをと。大守だいしゆと守護しゆごの等だいあれば。物主モノナシ少那シオナハ後ご。世よの守まもと介あいの如ごと。もとより連字れんじを借うける。連比属續れんひぞくじくの意いあそべ。秀實ひでまことハ連帥れんさいの連れんとて。大連だいれんハ武官ぶかん大臣だいじんも文官ぶんかん也や。文武ぶんぶの差別さべつハもあれがくまき。連帥れんさいの辨べんハ字じ義ぎ。是これかべくべ。又前輩まへだいの説せつ。連れんハ村主むらぬしあそべと。甚ごんに誣罔うばうあそびや。ほのよひ。大物主おほものぬし命みこと。オホモノヌシノミコト。命みことと書か。譬たとへ姓성の村主むらぬしの主ぬしを。りと訓き。と。新撰姓氏錄シンゼンセイジロク。大國おほくに主ぬし。命みこと。オホシニヌシノミコト。と。讀よべ。理りあり。そもそもとむと。かよひ。大たあうの畧りょう。辭ことほ。あくやく大おほノ字じ。おのりのかとあくやく唱うたふ。是これ讀よ則ならなり。姓氏錄セイジロク第十三卷じゅうさんじゅん。名な謂い。葦原色アシハラシキ許男キメイ神カミ。と。これよ由ゆ。大國おほくに主ぬしと。大穴车遲おほあなくる。その訓異ことこと。どく。笑わられども。かの一説いつせつのみ。大臣だいじんハ。成勢天皇セイセイの御宇ごうすよ。と。まつ。大物主おほものぬし命みこと。おほのりの内うちと假名かなづけ。非ひ。後ご。又按あん。大臣だいじんハ。成勢天皇セイセイの御宇ごうすよ。大臣だいじんを置おきせ玉たまひひ。後ご。又按あん。和名鈔ワメイ。官職くわんしょく。

大臣を於保伊萬宇智岐美と訓へ。れども正紀和名かべーとへまくば何とれ。無と萬と通へ。志と智と横音亦通へ。萬を音便ゆく萬宇と引た羅を省だら。じくやれべ於保伊萬宇智岐美ハ大連公と和訓を承り乍似う。玉加都麻。おうち。かと云ふことれど。當初大連と大臣の美稱と被を承り。彼も此もかねて唱わざる。ちや詳か。當初大連と大臣の美稱と被を承り。彼も此もかねて唱わざる。べくや。萬宇智の義へひき詳か。ねども。大臣の和名を。さうす。疑かべら。和名鈔大臣を於保萬豆利古止乃於保萬豆。養大納言を於保伊毛乃萬宇須豆。加政佐と訓へ。和訓を旨とせし世からともかく。かくへ。紀唱やくち恒の稱呼は便あらん。ありく前輩も職名の和訓ハ。又按をす。真人ハ姓より前より氏かあり。又人名やある。後よつけたまひと。又。前より姓かあり。又人名やある。用明天皇の皇后を穴穂部間人皇女とあらへ。元年夏四月の條下より。穴穂部ハその乳母の姓をへ。皇子皇女は名づけむ。間人ハ皇后のむん諱なり。又推古紀より間人連。塙益といふ者をもく。十八年冬十月新羅任那の使ベ京の條下より。こう間人ハ氏を連へ。姓を孝德紀より間人連老あり。五年春正月の間人連ハ姓氏を老ハ名也。この三間人を天武天皇。真人の姓を作り。皇親は賜モ。已前より。是より下へ。天武紀より栗田。

朝臣真人あり。十四年五月の栗田朝臣ハ姓氏也。真人ハ名かく。當時天皇のむん諱を。天渟中原瀛真人とす。あれども當朝。真人の姓と制作して。こゝとを皇親より賜。且との臣下より真人を名と仰ぐ。かくこの時。ひまく至尊のむん諱と避かく。制度かく。この後續紀。孝謙紀より雀部朝臣真人あり。天平勝宝三年七月の條下より。雀部朝臣ハ姓氏也。真人ハ名也。是のうち代。新撰姓氏錄。第二卷。第六卷より間人宿祢間人造の姓をかせず。間人ハ氏也。宿祢造ハ姓あり。和名鈔。姓氏錄。和名鈔。シウトと傍訓をかく。これともマヒトと讀。右の間人を刻木の書紀。及國郡丹後國竹野郡の郷名より。間人あり。訓詁。右の間人を刻木の書紀。及入彦五十瓊殖尊。崇神天皇。まく間ノ字をまくと讀。まくまへひまく上略。人名の真人をひく。推せ。間人も賓の假字かく。又按をす。宿祢も亦人名。姓。姓氏錄。大足尼命ハ高麗命十二世の後かく。只是の。允恭。

再按古語拾遺曰淨脚原朝改天下萬姓而云云其四曰忌士以爲秦漢二氏及百濟文氏等之姓。されども忌寸ハ帰化ゆくびりむるの事あるべども

夫皇のせん譯を雄浅津間稚子宿祢とある。若之助と少と同意。應神紀より
小泊瀬造祖宿祢臣あり。臣ハ姓宿祢ハ名也。應神十二年より名を賢遺臣と
賜ひ。同紀より又仁德紀も飛驥國有。一人曰宿禰其爲
一體有兩面各相背項今無頂云云。仁德天皇六十五年條下に見え。持統紀より
佐味朝臣宿那あり。三年六月の祐通ノ宿禰も宿那も宿祢と同名
たりべ。第四忌寸キニ第八稻置キナハ未詳且試よい。忌寸ハ歸化。歸化此云
到向あらべき故。この姓ハ諸蕃よ多かり。猶よく考く後釋べ。右八姓の外に姓
氏錄より載る姓首直村主縣主造ホア。枚舉より遼あらば。そと又初と内
やういん。首トハ大人。大人此云。大と大人此云。大と大人於保守。於保守
ありと大人よ首ノ字を借。是義訓。大人ハ人名よ多かり。ホア。直キニハ君
君ハ公と通用。直ハ正也。君ハ猶正。正此云。加美。とりみが如。されも亦義訓。人名を
昔より姓の直を價直の直と謬見。カタヒと讀來れ。をも悞とす明證ハ

新撰姓氏錄。第五卷。右佐伯直の條下にある。姓氏錄云。提要。伊許白別
命云。云以一狀復命天皇。應神詔曰。宜汝爲君治之。即賜封間。
別佐伯直姓也。前賜姓直謂君也。と注せと照べ。余が言の誣ると知り。
又姓氏錄訓詁と施せり。この條を何と云ひ。直よりみかアタヒと傍訓。
え。もとと甚し。又この姓は君の直字を借用せり。公直無私の義を取れ。
直ハ正切。萬事正直かく。公かくざまちかく。又彼君子持直道。直道公
而行者也。と云ふも。君の直字を借用。又按君の姓の
君公直と幾美と訓し。官職の守正。督首を加美と訓。これどもその義を則
り。一ありきとが通す。もとも亦かく。守正督首を加美と讀ゆ。も加美も鑒也。
士庶の邪正を鑒く。善政を行ふの義を取る。加美といふ。即鑒之姓の公君直も。
この意を得て解べ。繼體紀よりをも。筑紫君磐井が死後。世より之後を
筑前筑後守磐井。姓の君ハ君臣の君。君臣の君。君の姓を

改々。公とあやひへ。君臣の君と紳と易だゆるをもあらず。村主^{スラ}ハ總領^{セイリ}領^リ此^シ云須^{スル}。須久利ハ須布流^{スル}くとふと横音通す。もとると五音亦通す。書紀久利及續紀^{スル}見る。筑紫總領、吉備總領、周防總領、伊豫總領、みをスクリと讀す。天武紀^{スル}總令所も。和訓須布流^{スル}毛登^{スル}。總領と姓より村主^{スル}作りてスクリと村字を借りる。村落の意^{スル}。スダク^{スル}中^{スル}人主^{スル}と讀ハ大物主の主^{スル}也。りこり^{スル}横音通す。村主ハ紀伊國伊都郡の郷名もある。ことともスクリともべれ次^{スル}和名鈔九^{スル}。村主の訓詁^{スル}。又姓や^{スル}勝と書^{スル}もあす。これもスクリと讀す。總領村主勝同訓^{スル}。職官と姓族の差別あり。村主勝ハ假字^{スル}。同姓ゆちあくべかほ公と直と同訓^{スル}。その姓ハ別^{スル}が如^{スル}。造^{ツバ}ハ官掌^{スル}。官掌^{スル}此^シ云美^{スル}。如^{スル}主ハ首也。首^{スル}加美^{スル}。努之ハ猶加美^{スル}が如^{スル}。ベ^{スル}か^{スル}相通^{スル}下略^{スル}。又字義^{スル}由^{スル}釋^{スル}。父^{スル}やみやびの下略^{スル}。即秀^{スル}ハ助辭^{スル}。之^{スル}相通^{スル}う^{スル}どの下略^{スル}。即才^{スル}秀才^{スル}。秀才^{スル}此^シ云みやづととりふ。下^{スル}禮記の文^{スル}照^{スル}。

うべ。又職の造^{スル}ニ色有^{スル}。國造伴^{スル}造是^{スル}。伴^{スル}造ハ部^{スル}官奴^{スル}べ。令義解篇目^{スル}云。官奴正^{スル}大同三年。職貞令^{スル}云。官奴司正一人掌官^{スル}戶奴^{スル}婢^{スル}名籍^{スル}。義解云。依^{スル}戶令^{スル}官^{スル}戶奴^{スル}婢^{スル}。毎年本司色別各造^{スル}籍^{スル}通^{スル}。是^{スル}。又^{スル}造^{スル}字を借^{スル}。禮記第王制云。司徒論選士之秀者而升^{スル}之學^{スル}。後士升^{スル}於司徒者不^{スル}於鄉^{スル}升^{スル}於學^{スル}者不^{スル}征^{スル}於司徒^{スル}。曰造士^{スル}。註不^{スル}不^{スル}給^{スル}其繇役^{スル}也。造成^{スル}云云^{スル}。今云^{スル}義の隨^{スル}釋^{スル}。國造^{スル}國^{スル}學^{スル}。造^{スル}成士^{スル}又大領^{スル}。領^{スル}此^シ云美^{スル}。通^{スル}。孝德紀^{スル}少領^{スル}。スケノミヤツ^{スル}訓^{スル}。授^{スル}。類聚國史卷廿五^{スル}。延暦二十一^{スル}年十二月庚寅^{スル}。鎮守軍監^{スル}從五位下道鳴宿補御^{スル}。大國造^{スル}。大國造ハ大領^{スル}。大領ハ國司^{スル}隸^{スル}。職貞令第二云。大郡^{スル}大領一人掌撫養^{スル}。所部檢察郡領事餘准^{スル}此^シ少領一人。掌同^{スル}大領^{スル}。是^{スル}。續日本後紀承和五年云云。嘉祥二年閏十

二月庚午先是紀伊守從五位下伴宿祢龍男與國造紀宿
禰高繼不憊云云このと死祀詔よ國造非國司解却之色而輒
解却矣云云と謹させ玉ひりあり令よ大少領ハ國司よ隸りのあうざれざれ
亦不征於司徒といひのよ近し。わらよりく國造と伴造との威柄の同う
がるを知るべ。大約造ハ國造が本とて美稱を取る。姓ゆる命られうる姓の和訓
がるひかる。拾芥鈔^上姓戸と書玉子。又無戸姓をとひゆる。戸とシカハ木と
もよす。あくやうカバ木と訓考カ。姓とかぞのハ異そと名ひ玉ひ一訛舛ハ多く
秋草^{卷之上}姓名部^上論あれもとばけ。姓の和訓。筆ひのほひハ通^{骨へひとほと}也。續紀。十
所為かねもとばけ。姓の和訓。筆ひのほひハ通^{骨へひとほと}也。續紀。十
孝謙紀。天平勝寶三年。二月己卯。雀部朝臣真人^{まこと}上疏。骨
名^ねと書。新撰姓氏錄の序中。氏骨と書。骨字。氏字^{ふか}の訓か。ト
云を義訓。正しく姓の字訓。愚とサヌ。景行紀。美濃國造名ハ神骨と

是者^ひをそく。四年春二月。神骨^{かみ}ハ人の名あらず。姓の訓義を釋く證据^{あう}ト
姓と神骨^{かみ}と云ふ。天朝の萬姓ハ神の御名より起も。又神世の職名とも取く。
姓とし賜へば。これぞ子孫^こ傳へど。譬^{たと}へ。人死^しまば^たの形體ハ土よかれども。その骨^骨
か^くや遺^{のこ}ぐ姓ハその祖神の骨^骨如^い。あくをりを姓と神骨といひ形^{かたち}べ。又髮骨^{はつこ}の義
ともあく。死^し後^ご、髮^はも亦骨^骨となり。打ち落すもの。この故よ姓^姓戸ノ字を書^書ひ。ハ今^今後^ご人の
所為^所め^めある。もともとからず。有^あらず。と云ふ。又漢字の多く^よ釋^はバ姓氏^{せいし}又氏族^{しちやく}
熟^{じゆ}く姓^姓も族^族もその義^い。天子^{てんし}賜^{たま}姓^姓命^{めい}氏^し諸侯^{しょこう}命^{めい}族^{しやく}と云う。是上古の制
度^ど也。姓氏の淵源ハ斑固^{はんこ}白虎通^{しらとくつう}卷^{まき}論^{るん}より明^あり。王世貞^{おうせいつゆ}宛委餘編十二
四部稿卷^{よんぶつかうまき}よ。千家姓^{ちかせい}と輯錄^{あつろく}。又その氏族の沿革來由を辯^べ。正字通^{おうじつう}姓^姓
百六十七。よ。下^しよハ書禹貢。毛詩。左傳。前後漢書。唐書を引擧^{ひきよ}。氏の下^し辰集^{しんしゆ}漢書。說文。風俗
通^{つう}。六書故を引く詳^{くわ}釋^はれども姓と氏の差別定^あいだ。畢竟秦漢以来。萬姓^{まんせい}の外^{ほか}
隨^まゆく姓の外^{ほか}。氏の外^{ほか}姓^姓あれば。本邦の姓氏とその義異^い。かれがあくよ引^ひも

要か。秦漢以来の人比姓氏へこの土の苗字より一ヶれど。天朝ハ姓と氏の差別正あく。多治朝廷より賜らるへば。氏ハ私に改るありしが。されば將一字の損益も上表多く請あう。免許を歷ざれば自由はせば。多治比^ト丹墀^ト大枝^ト亦是上古の制度也。六七百年以降ハ苗字といふもの來て。氏と苗字と混雜して姓を唱るものがある。姓氏へあくともながり如。あらへあまど。清姓氏の所^トたゞや。稀少姓の者をす。そハ無姓者某と書く。三代實錄^九。仁和二年冬十月の條下云。三日戊午。勅^{メテ}无^キ姓者其名清實賜姓滋水朝臣貫右京一條。清實元来姓あるわべ。十一个年以前。罪ありて属籍を削らし。その身庶人^ト。カツレバ姓氏か。この日賜り。滋水ハ氏也。朝臣ハ姓也。又聞見の隨記錄ある。姓氏のあれど。不知姓某と書て。中古記^{大治五年}。廿三日云云。常陸清原近宗安房不知姓實信云云。是なり。右云々をくる。清原ハ氏也。清原氏ハ真人の姓ある。この時世ハ苗字を唱るのも多くあつて。

氏の^ト唱く姓と省くが恒^スありぬ。愚意かくの如くかれども官祿^{カズハ}の及家譜連綿^ト。と云ふ。此のよあいだ^ト姓を書^フと。憚^ムべ。庶人ハ肯^ム姓^ハ。又按考に拾芥釣^シ中卷。無^ク姓と題^トも。五十六氏の中よ。天神 地祇 天孫^ト。姓ちハ地祇^ト。別^ト。天孫^ト。別^ト。これと亦分ん爲^フ。卷十一。左京神天神。藤原朝臣。云云。大中臣。朝臣。云云。卷十二。左京神。天神。大伴宿^ト。云云。佐伯宿^ト。云云。同卷。天孫。出雲宿^ト。云云。入間宿^ト。云云。卷十六。地祇。吉野連^ト。云云。大神朝臣。云云。と錄^ト。云外。天神。地祇。天孫と云姓氏わるとぞ安^シ。かくと姓^ハ異^カ。むすもきこあひと。天神。地祇。天孫と姓^カと云玉^ヒハ。あく。千慮の一失^カ。やをひく。又按

大神朝臣オホカヒトと。才ホカヒト傷訓カツクニと讀ハタハタ。書紀シキを。

大三輪タリと書り神朝臣ミタマ。神社氏ミタマもこもよ始ハタハタ。新撰姓氏錄セイジロク第セイ十卷。曰大神タケミカツチ。朝臣ミタマ素佐能雄命タスサノミコト也。其タケミカツチ子孫ミタマ大國主タケミカツチ神之後也。初大國主タケミカツチ神娶ミタマ三鳴溝杭耳之女玉櫛姫タマハシヒメ。夜未曙アツモニ去不ハタハタ曾ハタハタ畫到ハタハタ於是玉櫛姫タマハシヒメ。館守係衣タマハシヒメ至明隨アラヌミテ苧尋覓アラヌミテ經於茅渟縣陶邑直指アラヌミテ大和國御諸山還視アラヌミテ苧遺アラヌミテ唯有三榮因アラヌミテ之號アラヌミテ姓アラヌミテ大三榮又大和國城上郡の鄉名アラヌミテ大神タケミカツチあり。これと於保無知アラヌミテ唱ハタハタ和名鈔アラヌミテ卷之九アラヌミテおほむちアラヌミテへがほかむちアラヌミテの中略アラヌミテ。平氏アラヌミテハ軍書アラヌミテ記アラヌミテをり。桓武アラヌミテの皇子葛原親王アラヌミテの子孫アラヌミテ。

新撰姓氏錄編末追加云桓武天皇男一品式部卿葛原親王アラヌミテ一男大學頭從四位下高棟王天長二年閏七月賜平朝臣姓貫左京貞觀九年五月至アラヌミテ大納言正三位薨アラヌミテ六十四歲余後高棟朝臣弟無一位高見王男高望王アラヌミテ亦賜平朝臣是平相國入道アラヌミテ中高望朝臣アラヌミテの後世アラヌミテ多々累世軍功アラヌミテ有アラヌミテ。世俗アラヌミテ云アラヌミテ平家アラヌミテとアラヌミテ葛原アラヌミテの後裔アラヌミテは限アラヌミテまアラヌミテとアラヌミテ。この故

孝證アラヌミテ也。平氏アラヌミテは數家アラヌミテあり。凡源氏アラヌミテは數流アラヌミテある。との祖皇アラヌミテを揭アラヌミテ。桓武アラヌミテ仁明アラヌミテ文德アラヌミテ光孝アラヌミテの四帝アラヌミテ是アラヌミテ。延長八年六月廿六日藤原朝臣清貫卿アラヌミテと俱アラヌミテ。清涼殿アラヌミテゆく震死アラヌミテ。右中辨内藏頭平希世朝臣アラヌミテ仁明天皇御子アラヌミテ本康親王アラヌミテの男雅望王アラヌミテの子アラヌミテ。母葛原親王アラヌミテの子行忠王アラヌミテの男佐幹王アラヌミテ也。平朝臣の姓アラヌミテを賜アラヌミテ。見皇統紹運錄及諸家アラヌミテ又文德天皇の御子惟彦親王アラヌミテの孫寧幹王アラヌミテも平朝臣の姓アラヌミテを賜アラヌミテ也。見皇統紹運錄。平氏譜アラヌミテ。又文德天皇の御子惟彦親人平朝臣兼盛アラヌミテ。光孝天皇の御子是忠親王アラヌミテの男興我王アラヌミテの孫アラヌミテ平朝臣アラヌミテ。是忠親王アラヌミテの子孫アラヌミテも亦多く。萬多親王アラヌミテ葛原親王アラヌミテ弟アラヌミテ。行・潔姫アラヌミテ等五人アラヌミテ。あアラヌミテの三家アラヌミテ。桓武以外の平氏アラヌミテ。それアラヌミテは平氏アラヌミテ。桓武アラヌミテの庶流アラヌミテ。葛原親王アラヌミテの子孫アラヌミテも亦多く。萬多親王アラヌミテ桓武天皇子アラヌミテ。行の男也。三代實錄卷四十九光孝天皇紀仁和二年秋七月十五日壬辰山城守從五位上與我王男安平篤行アラヌミテ有木内行アラヌミテ。賜姓平朝臣アラヌミテ。新撰姓氏アラヌミテの子正躬王アラヌミテの男諸姫アラヌミテ十五人アラヌミテ。二代實錄卷六清和廿日戊午勅アラヌミテ參議正四位下行彈正大弼正弟王男散位從位下住世王元位繼世王基世王家世王益世王是世王。是世王。

親王の裔安典王。同書卷ノ四十七。光孝紀。仁和元年。二月八日
親王之後。從四甲寅。無一位。安典王。賜姓平。朝臣故。二品仲野
上輔世王之子也。大凡この諸平ハ葛原親王の子孫也。がくども
入道相國。淨海及北條氏。織田氏。兵馬の權を執る。海内を武断せり。がくども
この平氏の多かりも。均のううなる勢ひをへて。萬葉の中。その文字は優美あり。源平
兩朝臣よ。是むれや。平朝臣ハ平安宮の平をとれり。藤原氏。ゆ。鍊足公範
子孫つらざるあり。藤原朝臣第貞卿。是なり。續紀。廿。廢帝紀。天平寶
弟貞者。平城朝左大臣。長屋王。子也。天平元年。長屋王自盡
字七年。冬十月丙戌。參議禮部卿。後三位。藤原朝臣弟貞薨
其男從四位下膳夫王。無位桑田王。葛木王。鈎取王。皆經時
安宿王。黃文王。山背王。并女教。勝。復。合。從坐。以。藤原太政大
臣之女所生。特賜不死。勝寶八歳。安宿王。黃文王謀反。山背
王陰上。其變。高野天皇嘉之。賜姓。藤原朝臣。名弟貞。かくども
ニジカニタマジリ。ヒキテ。ヨシモテ。モ。ヒキ。ヲ

弟貞卿の藤原氏タケヒラ也。母氏の姓タケヒラ。あく皇別の藤氏タケヒラ也。源氏ハ。

嵯峨天皇タケヒラノミコト。文德、清和、光孝、宇多、醍醐、村上、花山、三條の數流タケヒラノミコト也。あくもとも中葉タケヒラノミコト。清和の一派紛貞タケヒラノミコト。これも亦タケヒラノミコト。威徳タケヒラノミコト。源氏ハ。與天子同源タケヒラノミコト。義を取タケヒラノミコト。命タケヒラノミコト。母タケヒラノミコト。北史タケヒラノミコト。第十一卷。列傳。第六十。

源賀傳云。源賀タケヒラノミコト。西平樂郡人。私署河西王。秃髮傉檀タケヒラノミコト之子也。云云。太武素聞其名。及見器其機辯。賜爵西平侯。謂曰。卿與朕同源。因事分姓。今可爲源氏タケヒラノミコト。又按タケヒラノミコト。又按タケヒラノミコト。續紀。二。聖武紀。天平八年。十一月丙戌。從三位葛城王。從四位上佐タケヒラノミコト。爲王等。請姓表曰。賜姓タケヒラノミコト。或真人。或朝臣。源始王家流終タケヒラノミコト。臣氏同書。八。孝謙紀。天平勝寶三年。二月己卯。典膳正。正六位下。雀部朝臣真人等。請改其祖巨勢大臣タケヒラノミコト。爲雀部大臣疏曰。遂骨名之緒。永爲無源之氏。望請云云。云云。あくもとも。

姓源の故事タケヒラノミコト。取タケヒラノミコト。後タケヒラノミコト。三代實錄。陽成紀。元慶八年。二月廿三日。叙位の紹タケヒラノミコト。散位後。四位下。源朝臣平タケヒラノミコト。とくに人タケヒラノミコト。その姓名タケヒラノミコト。卷タケヒラノミコト。藤原朝臣藤タケヒラノミコト。亦この類タケヒラノミコト。清和タケヒラノミコト。亞タケヒラノミコト。嵯峨。宇多。村上の二源タケヒラノミコト。俗小知らぬる多う。あく渡邊佐木。赤松等。夥軍書タケヒラノミコト。見れタケヒラノミコト。源氏ハ。皇子タケヒラノミコト。必命タケヒラノミコト。氏タケヒラノミコト。花山。三條以後タケヒラノミコト。かや多かん。考タケヒラノミコト。柿本氏ハ。國史タケヒラノミコト。見れタケヒラノミコト。多うあれど。人麻呂タケヒラノミコト。漏タケヒラノミコト。只タケヒラノミコト。その考据タケヒラノミコト。起タケヒラノミコト。もの。萬葉集タケヒラノミコト。時世タケヒラノミコト。淨御原の朝タケヒラノミコト。天武タケヒラノミコト。り。天武タケヒラノミコト。藤原宮の季文武タケヒラノミコト。迄タケヒラノミコト。平城の朝タケヒラノミコト。元明タケヒラノミコト。撰姓氏錄タケヒラノミコト。第七卷。大。天足彦國押人タケヒラノミコト。命之後也。敏達天皇タケヒラノミコト。御世タケヒラノミコト。依家門タケヒラノミコト。有柳樹タケヒラノミコト。爲柳本臣タケヒラノミコト。とく。初ハ臣の姓タケヒラノミコト。よ。天武天皇タケヒラノミコト。十三年。十一月戊申朔。大三輪君等。五十一氏タケヒラノミコト。とく。朝房タケヒラノミコト。姓タケヒラノミコト。を賜タケヒラノミコト。書紀タケヒラノミコト。卷十九。とく。柿本氏ハ。國史タケヒラノミコト。見れタケヒラノミコト。を。搜タケヒラノミコト。天武紀タケヒラノミコト。小錦上タケヒラノミコト。冠タケヒラノミコト。位也。柿本臣ハ。後タケヒラノミコト。見タケヒラノミコト。二十年。十。續紀。元明紀タケヒラノミコト。

十四

首名同聖武紀・穗積朝臣大人。同矢田部老。同廢帝紀・榎井朝臣子祖光仁。同世紀・大中臣朝臣子老。同村國連子老。同伊勢朝臣老人。同四紀・十・桓武紀・老人。同四十・桓武紀・老人。同光仁紀・石川朝臣。同四十・桓武紀・老人。同四十・桓武紀・残缺後紀八・桓武紀・廣井宿祢弟名。續日本通計大人十一人。老人四人。老人。同他猶有べ。按ちよ老人。孝德紀間人連老人の下より分注て。老此云於喻とあひぐづまもあひと讀べ。大人ハ。ちくひと讀べ。印行の書紀及續紀より大人を。ウシ。老人を。オキナヒト。と傍訓するへたゞへ。首名音那。し名。弟名。もの大人の假字也。老人ハ。ちくひと讀べ。大人ハ。ちくひと讀べ。首名ハ。小老の假字。かずべられバ。子老よ。かずべ。人名。かずべ。是をもかと取と讀べ。子首ハ。小老の假字。かずべられバ。子老よ。かずべ。人名。かずべ。人名を大人よ假すよ。姓の首を。おほとと讀ふ。よ。ほと省き。あらもと讀べ。首名を大人よ假すよ。姓の首を。おほとと讀ふ。よ。ほと省き。名字を加え。おほと訓ふ。また時世ハ俗より萬葉假名の行ふ。と。入名矣。異字同訓のもの多一。且假名遣ひの正と誤と云ふ。天武紀下よ。忌部首印本よ。名の首。

中々カウタヒ衛訓。又前ノ錄セ一子首。准此。萬葉集第六。
假字。又元正紀。高田前人比舊あり。この久比作の假名。又按考る。萬葉集第六。
大貳、小野、朝臣老及神社忌寸。老が歌あり。第十六。吉田連老といふ者
をも。この類の名。被書ふを猶多か。忌部首。首と共ふ。
又四人老ハ通計八人也。沙弥麻呂 ゆも同名
六人あり。佐伯宿祢沙弥麻呂。續紀。六。元明紀。阿倍朝臣沙弥麻呂。同十
武土師連沙弥麻呂。同廿三。聖
忌才沙弥麻呂。同三十。孝昆解宿祢沙弥麻呂。同卅八。桓武
五月賜高宿祢。是事也。入鹿 も同名四人あり。蘇我臣入鹿。書紀。皇和
姓。賜高宿祢。是事也。入鹿。見前卷。八。多朝臣入
朝臣入鹿麻呂。残缺後紀。
鹿。同書。二十。是事也。蝦夷 も亦二人あり。蘇我臣蝦夷。欽明天紀。極紀。加茂朝
臣 蝶夷。持統 守屋 も亦二人あり。物部弓削連守屋。推古大伴連杜
屋。天武下。杜屋ハ守屋の假字也。守屋ハ今ノ番屋の事。件の兩人取くと名と
せ。續紀。光仁紀云。天應元年五月甲戌伊勢國言鈴鹿。關城
也。續紀。光仁紀云。天應元年五月甲戌伊勢國言鈴鹿。關城

戸并守屋四間。始二十四日至二十五日。自響不正。其聲如以木
衝之。死。抑守屋。蝦夷入鹿。或逆臣。亦或後同名者多也。後世
嫌忌甚。似也。抑勝。押勝。也。同名也。河内馬養首。押勝。欽
紀。藤原惠美。朝臣押勝。廢帝。秀他。天武紀。繻造。忍勝。亦押勝
也。忍勝。同訓。亦假名。異て。先同名也。清麻呂。同名四人。田口
朝臣清麻呂。續紀卅八。桓武紀。大中臣。朝臣清麻呂。同廿。孝
石川。朝臣清麻呂。同卅三。和氣。朝臣清麻呂。孝謙後紀。光仁
後紀。桓武紀。祖。この中。和氣氏の婦幼也。亦精忠當時。大伴宿禰家持。同卅八。黑主
亦二人。小治田。朝臣宅持。續紀。大伴宿禰家持。同廿八。黑主
也。同名也。池田。朝臣黑主。類聚國史。九。弘仁中人也。節婦。春部君。黑主
女。同書。五。亦大伴宿禰黑主也。三人。家持。續紀。大伴宿禰家持。同廿八。黑主
武紀。桓武紀。祖。この中。和氣氏の婦幼也。亦精忠當時。大伴宿禰家持。同廿八。黑主
臣族。書。紀。十九。柿本。朝臣。後。續紀。四。元明紀。亦大伴宿禰大夫也。家持
臣族。欽明紀。柿本。朝臣。後。續紀。四。元明紀。亦大伴宿禰大夫也。家持

三人カミヘイ。猿カニ九大夫クマタナヒト未詳シテナシ。說ツケ。柿本カキモト朝臣カミ後アフタ是シテの他カツチ土蜘蛛カツチ打獲ウサギ。書紀カガハ七セ。

紀カニ。朝臣カミ猿カニ取ハシム。類聚國史カニ六十六ロクシシ紀カニ。朝臣カミ田タチ工ハラフ之ノ祖父カミハシム也カニ。神紀カニ。猿カニ田彦カニタハシム。神カニ猿女カニコロ君カニヒメ也カニ。其他カツチ。

貉カニ。也カニ同名カニ。石川カニ。朝臣カミ虫カニ名カニナミ。天武カニカベ刑部カニ直虫カニ名カニナミ。光仁カニヒメ。仁カニヒメ。其他カツチ。

仁明天皇カニミツノミコト嘉祥二年カニミツノミコト。七月廿九日カニミツノミコト。卷書カニミツノミコト。辛國カニミツノミコト虫カニミツノミコト名女カニミツノミコト好古カニミツノミコト。錄上カニミツノミコト卷カニミツノミコト。也カニミツノミコト同名カニミツノミコト。小子部雷カニミツノミコト。書紀カニミツノミコト十四カニミツノミコト。雄略カニミツノミコト。紀カニミツノミコト。雷カニミツノミコト。初カニミツノミコト名螺蠃カニミツノミコト。七年秋カニミツノミコト。神蛇カニミツノミコト以カニミツノミコト獻カニミツノミコト。于カニミツノミコト時カニミツノミコト雷霆カニミツノミコト。神カニミツノミコト。捉カニミツノミコト。三カニミツノミコト諸岳カニミツノミコト。天皇カニミツノミコト。

懼カニミツノミコト而カニミツノミコト避カニミツノミコト。諸安履カニミツノミコト因カニミツノミコト改カニミツノミコト。螺蠃カニミツノミコト名カニミツノミコト爲カニミツノミコト雷カニミツノミコト。坂田公雷カニミツノミコト。同カニミツノミコト正月カニミツノミコト。王カニミツノミコト。又作カニミツノミコト。牟都岐カニミツノミコト。王カニミツノミコト。先武紀カニミツノミコト。祖カニミツノミコト。其他カツチ。

中カニミツノミコト同名カニミツノミコト。中臣連カニミツノミコト。正月カニミツノミコト。書紀カニミツノミコト二十カニミツノミコト。正月カニミツノミコト。仁紀カニミツノミコト。桓武紀カニミツノミコト。正月カニミツノミコト。王カニミツノミコト。仁紀カニミツノミコト。桓武紀カニミツノミコト。正月カニミツノミコト。王カニミツノミコト。先武紀カニミツノミコト。残缺カニミツノミコト。

後カニミツノミコト紀カニミツノミコト。祖カニミツノミコト。其他カツチ。萬葉集カニミツノミコト第十六カニミツノミコト。大舍人カニミツノミコト。巨勢カニミツノミコト。朝臣カニミツノミコト。豐人カニミツノミコト。字カニミツノミコト正月麻呂カニミツノミコト。

とカニミツノミコト者カニミツノミコト兄カニミツノミコト。虫カニミツノミコト。名字カニミツノミコト。名カニミツノミコト多カニミツノミコト。中カニミツノミコト粟田カニミツノミコト。臣カニミツノミコト飯虫カニミツノミコト。書紀カニミツノミコト廿五カニミツノミコト。

阿倍カニミツノミコト。朝臣カニミツノミコト梗虫カニミツノミコト。續紀カニミツノミコト十一カニミツノミコト。ハカニミツノミコトの名雅致カニミツノミコト。多カニミツノミコト。意カニミツノミコト味カニミツノミコト。孔子カニミツノミコト。

家語カニミツノミコト執櫻カニミツノミコト。保蟲カニミツノミコト三百有六カニミツノミコト。長カニミツノミコトより出カニミツノミコト。之カニミツノミコト。他カツチ。縣主カニミツノミコト飯粒カニミツノミコト。書紀カニミツノミコト。

閑紀カニミツノミコト。安東漢氏カニミツノミコト直糠兒カニミツノミコト。同カニミツノミコト十九カニミツノミコト。欽明紀カニミツノミコト。舍人カニミツノミコト造糠虫カニミツノミコト。同カニミツノミコト廿九カニミツノミコト。天武紀カニミツノミコト。あり。石上朝臣カニミツノミコト。

意カニミツノミコト。名カニミツノミコト不カニミツノミコトなカニミツノミコトべカニミツノミコト。福草カニミツノミコト。也カニミツノミコト同名カニミツノミコト。葛城福草カニミツノミコト。書紀カニミツノミコト廿五カニミツノミコト。神社カニミツノミコト。

福草カニミツノミコト。同カニミツノミコト是カニミツノミコト。鯨カニミツノミコト。也カニミツノミコト同名多カニミツノミコト。大伴カニミツノミコト。連鯨カニミツノミコト。書紀カニミツノミコト廿三カニミツノミコト。河内カニミツノミコト直。

鯨カニミツノミコト。同カニミツノミコト廿七カニミツノミコト。民直鯨カニミツノミコト。同カニミツノミコト廿八カニミツノミコト。盧井連鯨カニミツノミコト。同カニミツノミコト廿九カニミツノミコト。粟田カニミツノミコト。朝臣カニミツノミコト鯨カニミツノミコト。續カニミツノミコト日本後紀カニミツノミコト十六カニミツノミコト。

大伴カニミツノミコト宿カニミツノミコト稱鯨カニミツノミコト。同カニミツノミコト廿九カニミツノミコト。刑部造真鯨カニミツノミコト。三カニミツノミコト代實錄カニミツノミコト。鯨カニミツノミコト。七カニミツノミコト清和紀カニミツノミコト。

采文鮒カニミツノミコト。文書紀カニミツノミコト廿三カニミツノミコト。物部朴井連鮒カニミツノミコト。同カニミツノミコト廿五カニミツノミコト。吉士小鮒カニミツノミコト。同カニミツノミコト廿七カニミツノミコト。

智カニミツノミコト。其他カツチ。萬葉集カニミツノミコト第十六カニミツノミコト。土師宿祢水通カニミツノミコト。字志婢麻呂カニミツノミコト。といひ者カニミツノミコトをえう。

この志婢カニミツノミコトも鮒カニミツノミコトの假名カニミツノミコト。也カニミツノミコトぬる考カニミツノミコト。堅魚カニミツノミコト。

堅魚カニミツノミコト。同カニミツノミコト卅カニミツノミコト。聖武紀カニミツノミコト。河原毗登堅魚カニミツノミコト。同カニミツノミコト卅カニミツノミコト。茅縣犬養宿祢堅魚麻呂カニミツノミコト。

同カニミツノミコト武紀カニミツノミコト。安倍カニミツノミコト。朝臣堅魚カニミツノミコト。殘缺カニミツノミコト後紀カニミツノミコト廿カニミツノミコト。謙後紀カニミツノミコト廿二カニミツノミコト。大伴カニミツノミコト宿祢雄堅魚カニミツノミコト。作カニミツノミコト。

小堅魚カニミツノミコト。殘缺カニミツノミコト伴カニミツノミコト宿祢真堅魚カニミツノミコト。類聚國史カニミツノミコト九カニミツノミコト。天長中人カニミツノミコト也カニミツノミコト。この他カツチ。豊岡宿祢真黑麻呂カニミツノミコト。續カニミツノミコト後紀カニミツノミコト廿二カニミツノミコト。この真黑麻呂カニミツノミコトの真黑カニミツノミコトも目黒堅魚カニミツノミコト。よりかく人歎カニミツノミコト。目黒堅魚カニミツノミコトの名目カニミツノミコト。東鑑カニミツノミコト。よきをえう。

鯛カニミツノミコト。名字カニミツノミコト。名とせカニミツノミコト。凡直黑鯛カニミツノミコト。續紀カニミツノミコト廿九カニミツノミコト。

大中臣朝臣鯛取。残缺後紀十七。安倍朝臣鯛絆。續後高道宿称鯛釣。同八。この他鯛身命。同八。小鯛王。萬葉集又。仁明天皇の嘉祥二年十一月廿日賣買家地の券書よ秦忌寸鯛女。好古日。有。鯛魚。ナ。モ亦同名あり。吉備品遜部雄鯛。書紀十。難波玉造部。鯛魚。文。同十五。鴨朝臣子鯛。續。鯛魚。文。欽明紀十。鯛魚。文。欽明紀十九。蘇我臣興志。孝德紀。尾張宿祢乎己志。續。明大神朝臣興志。同紀。允連男事志。同九。元。またの名をく。鯛の。船。也。も亦同名あり。物部。船。也。も亦同名あり。鹽屋鯛。續。鯛魚。書紀廿五。孝德紀。分注。云。鯛魚。此云。舉能之。盧。靖。サ。モ亦二文あり。紀朝臣靖麻呂。續。靖。サ。堺部宿祢鯛。天武紀。同廿九。靖。サ。祖武田口。朝臣佐波主。續。後紀四。この他林宿祢婆。婆。残缺後紀。五。拒武紀。ア。あ。婆婆國の婆婆カベト。との餘魚をすと名とせり。衆夥カ。枝。举。百官の名よ。多く取ま方ある。あ。按。婆。魚ハ陰中の陽也。あ。と。多くむ。百官の名よ。多く取ま方ある。

蟲海集類。物曰。水族乃陰中之陽。何以知其然。於云云魚乃
陰物而得陽氣多故。腹內生脬。是以能浮躍魚目晝夜不瞑。
因知其爲陰物而得陽多者也。とりて、より小をりて大よ譬へ。人主ハ陽也。
庶民ハ陰也。古官ハ陰中之陽也。加之諸魚天神御子より仕事あり。
古事記卷より天津日高日子番能迹迹藝命天降すと。竺紫日
向之高千穗之久布流多氣より坐せり。底度久御魂都夫多氣
都御魂沫佐久御魂等猿田毗古命を送て還到る條下より云乃
悉追聚鱗廣物鱗挾物以問言汝者天神御子仕奉耶之時
諸魚皆仕奉白之中云云後生の人臣名を鱗介より取より多かりしも
あまくよ縁の更かりべし。又按ちるよ同書卷より大穴牟遲神欺きし。八十
神より焼れきし段より云。神產巢日之命時乃告訓黒貝與蛤貝比賣
命作活云云とりて鱗介とぞ名と存とも多くあまくよとぞ。又按ひるよ

都宿祢腹赤ハラカ類聚國史九十九弘アスと栗宿祢轉麻呂マス二代實ミタカ。仁十四年正月叙位マセ。と栗宿祢轉麻呂錄六。その名を等類ドウルイとせん然ドクダム。一説腹赤ハラカ轉マセ。とて。今俗ミタカ。姓の子を腹赤子ハラカコノコ。又一説。腹赤ハラカハ地名アシカ。肥後國玉名郡長瀬アカミ。腹赤濱ハラカマツリ。是ハズ。江家次第カミナリ。元日節會カミナリ。腹赤奏ハラカタマフ。條下ハシナリ。考ハシナリ。儒佛ハラカ。名號ハラカ。をりて名ハラカとせハラカ。宮首阿弥陀ハラカトトト。書紀廿八。我閑連阿弥陀續紀八。聖武紀。船連夫子ハラカ。同三文。文忌寸釋ハラカ。加武紀。同三文。大宅朝臣君子ハラカ。同二十三。衣縫造孔子ハラカ。同三文。文忌寸釋ハラカ。同三文。大宅朝臣君子ハラカ。同二十九。阿倍朝臣子路ハラカ。廢帝紀。縣犬養宿禰老子ハラカ。同卅四。等ハラカ。あもハラカ。ハ兒戲ハラカ。よ近ハラカ。この故ハラカ。高野天皇。神祐景雲二年五月丙午詔曰。入國問諱。先聞有之。况從ハラカ。今何曾無避見ハラカ。諸司入奏。名籍或以國主國継名向朝臣。名可ハラカ。不寒心。或取真人朝臣立字。以氏作字。是ハラカ。近冒姓復用佛菩薩。

及聖賢之號。每經聞見。不安于懷。自今以後。宜勿更然。背里名勝母曾子。不入其如ハラカ此等類。有先著者。即改換。務從禮典。見續紀。卷十九。禁ハラカ。也。即ハラカ。之。有。尔後圓融院の御宇。藤原朝臣伊尹公ハラカ。日本紀。一條院の御宇。藤原朝臣伊周ハラカ。伊尹公ハラカ。一條院の御宇。藤原朝臣伊周ハラカ。伊周ハラカ。伊尹周ハラカ。二字ハラカ。是ハラカ。先藤原諸葛ハラカ。二代實錄。光孝紀。漢の孔明ハラカ。復姓を取ハラカ。又花山の朝。大江匡衡ハラカ。漢の匡衡ハラカ。を取ハラカ。是ハラカ。この類似名。遙ハラカ。一條院の御宇。江口の遊女小觀音ハラカ。今様。高倉院の御宇。加賀の佛物語。山城國淀河漁者。弥陀二郎ハラカ。山州名迹。あり。里見の家臣。原田大佛之介。菅野神五郎ハラカ。本朝。あり。これらの姓名。軍記野衆中。猶ハラカ。徒然草。八十二段。連歌。法師。阿弥陀佛。十六夜日記。藤原爲相卿の義阿佛尼。甲陽軍鑑。武田孫六。通定佛。入道。某佛と号。書名。と。某佛と号。書名。宿祢中庸ハラカ。三代實錄。清和紀。伴。

多^{タカシ}。とハ押坂史毛屎^{オシトケ}。書紀十七。錦織首人僧^{コリホトノツワ}。誰古紀。倉臣小
屎^{ウサギ}。同廿八。阿倍^{アベ}。朝臣男屎^{ヲシノト}。日本逸史。天長中人ト部乙屎麻呂^{ウラベノカトタケ}。三代實錄十
節婦^{セキブ}。巨勢^{クニシ}。朝臣屎子^{ヲシコ}。同廿二。清和紀。下野屎子^{ヲシコ}。忍海山下^{アシマツシ}。光孝^{カヒコ}。妻^{カヒコ}
異名^{イニシメ}。名^{メシメ}。時俗の習ひ。亦怪む足らば。今俗よ。平氏^{ヒラシ}。源を名とす。
藤氏^{フジシ}。平を名とす。末子を太郎と名つけ。長男を二郎。三郎。五郎など名づくをも。昔の人をほ在り。およ異ことあべて。昔も二男を太郎と名づけり。小説^{ハナシ}。稀^{ハス}。落葉物語卷の四。父のほど。云々兄の童^{ハチ}。お子^{ハチ}。子^{ハチ}。御名も。弟太郎とくに木玉^{キタマ}。云々とくに木^キ。云々とくに木^キ。澤^{カズ}。草子物語。證^{シテ}。愛子の^{ハチ}。されば^{ハチ}。此物^{ハチ}。語^{ハチ}。限^{ハチ}。あまうの類^{ハチ}。あまうの類^{ハチ}。天武持統の朝廷^{カミツ}。文德^{モンテ}。清和^{カヒコ}。

朝廷^{カミツ}。縁氏^{ハシシ}。取名^{ハシメ}。ちの多かり。との類^{ハシメ}。都努牛飼^{ツヌノウシ}。都努^{ツヌ}ハ角^{ツヌ}。角^{ツヌ}。牛^ヌを名とす。柿^{カキ}。本^{カキ}。援^{カキ}。以^{カキ}上^{カキ}。柿本^{カキモト}。建石^{カキモト}。橘^{モロコシ}。諸兄^{カキモト}。枝^{カキモト}。諸兄^{カキモト}。蓑笠^{カゲリ}。笠麻呂^{カゲリ}。以上^{カゲリ}。船^{カゲリ}。小楫^{カゲリ}。山邊^{カゲリ}。何鹿^{カゲリ}。鹿^{カゲリ}。丹波國の郡名也。イカナル。石川^{カゲリ}。毛比^{カゲリ}。毛比水^{カゲリ}。淡路^{カゲリ}。三船^{カゲリ}。石川^{カゲリ}。津濱^{カゲリ}。加茂^{カゲリ}。太川^{カゲリ}。石川^{カゲリ}。魚麻呂^{カゲリ}。林^{カゲリ}。山^{カゲリ}。主^{カゲリ}。以上^{カゲリ}。殘^{カゲリ}。橘^{カゲリ}。枝子^{カゲリ}。橘^{カゲリ}。千枝^{カゲリ}。

橋^{モロコシ}。百枝^{モロコシ}。橋^{モロコシ}。時枝^{モロコシ}。橋^{モロコシ}。未^{モロコシ}。橋^{モロコシ}。枝^{モロコシ}。主^{モロコシ}。以上^{モロコシ}。續船^{モロコシ}。湊^{モロコシ}。守^{モロコシ}。石川^{モロコシ}。橋^{モロコシ}。繼^{モロコシ}。御^{モロコシ}。

船^{カネ}。賀祐^{カネ}。賀祐^{カネ}。櫂^{カネ}。櫂^{カネ}。南端^{カネ}。永河^{カネ}。文德^{カネ}。實錄^{カネ}。柿本^{カネ}。枝成^{カネ}。橘^{カネ}。信蔭^{カネ}。橘^{カネ}。三夏^{カネ}。

以^{カネ}。三^{カネ}。この他^{カネ}。猶^{カネ}。近來狂歌師の狂名^{カネ}。と^{カネ}。よ^{カネ}。近^{カネ}。氏^{カネ}。縁^{カネ}。名^{カネ}。を^{カネ}。代^{カネ}。實錄^{カネ}。この他^{カネ}。猶^{カネ}。近來狂歌師の狂名^{カネ}。と^{カネ}。よ^{カネ}。近^{カネ}。氏^{カネ}。縁^{カネ}。名^{カネ}。を^{カネ}。

取^{カネ}。唐人の名^{カネ}。縁^{カネ}。字^{カネ}。本^{カネ}。本^{カネ}。軟臂^{カネ}。顔^{カネ}。圓^{カネ}。字^{カネ}。子^{カネ}。淵^{カネ}。阮籍^{カネ}。莊論^{カネ}。

川^{カネ}。圓^{カネ}。謂^{カネ}。仲由^{カネ}。字^{カネ}。子路^{カネ}。按^{カネ}。由^{カネ}。與熊^{カネ}。近^{カネ}。子^{カネ}。路^{カネ}。熊^{カネ}。一名^{カネ}。也。然^{カネ}不^{カネ}載^{カネ}。之^{カネ}。諸^{カネ}余^{カネ}雅^{カネ}。疑^{カネ}。取^{カネ}。由^{カネ}。之^{カネ}。字^{カネ}。以^{カネ}歎^{カネ}。熊^{カネ}。一名^{カネ}。耳。之^{カネ}。

如^{カネ}。六親^{カネ}。を^{カネ}。名^{カネ}。と^{カネ}。せ^{カネ}。の^{カネ}。坂本^{カネ}。吉士^{カネ}。長兄^{カネ}。佐^{カネ}。貴山君^{カネ}。親人^{カネ}。極^{カネ}。額田^{カネ}。部連^{カネ}。螺^{カネ}。孝^{カネ}。

紀^{カネ}。百舌鳥^{カネ}。長兄^{カネ}。同^{カネ}。佐^{カネ}。貴山君^{カネ}。親人^{カネ}。續^{カネ}。聖文室^{カネ}。真人^{カネ}。古能^{カネ}。

可^{カネ}。美^{カネ}。光仁^{カネ}。紀^{カネ}。古能^{カネ}。この他^{カネ}。巨勢^{カネ}。臣^{カネ}。人^{カネ}。天智^{カネ}。多治比^{カネ}。真人^{カネ}。家^{カネ}。主^{カネ}。聖武^{カネ}。

紀^{カネ}。忌^{カネ}。部宿^{カネ}。稱^{カネ}。雲梯^{カネ}。類史^{カネ}。九石^{カネ}。上^{カネ}。朝臣^{カネ}。雖^{カネ}。同^{カネ}。卷^{カネ}。秋篠^{カネ}。朝臣^{カネ}。庚子^{カネ}。續^{カネ}。後^{カネ}。

一^{カネ}。記^{カネ}。十^{カネ}。あまう^{カネ}。絶^{カネ}。等^{カネ}。類^{カネ}。不^{カネ}。惡名^{カネ}。を^{カネ}。罪人^{カネ}。賜^{カネ}。不^{カネ}。孝謙天皇^{カネ}。天

平寶字元年秋七月庚戌勘問橘奈良麻呂云云於是皆下獄又分遣諸衛掩捕逆黨黃文改名多道祖度比大伴古麻呂多治比瀆養小野東人賀茂角足呂志乃等並杖一下死安宿王云云孝謙紀廿二黃文王よ賜り罰名多夫禮を戲今俗云類かえり角足が罰名乃呂志ハ達鉢の義也今俗より多執鳴見續紀廿三廢帝紀三十破内親王有罪詔賜厨真人厨女性名令莫在京中續紀三十高野天皇神護景雲三年五月壬辰不厨女ハはくもの今俗より多夫禮女よひとて號也罰名多夫禮此の厨女よ似る名ハ平群朝臣炊女あり炊女ハ卷四十恒武紀又卷三代實錄卷四十七光孝紀山城國徒一位平野神社云云同神社預一人御炊女四人云云この炊女ハ神社よ織らく職名也神護景雲三年九月己

丑和氣清麻呂賜名穢麻呂為因幡國貢外僉未及之任所俄流於大隅國孝謙後紀提要仁明天皇承和九年秋七月庚申罪人橘逸勢除本姓賜非人姓流伊豆國續日本後紀卷十二由之非人ハ今の悲人の類すとあらず是非の非なり維摩詰經不思畏時非人得其便往非人如羅刹變形為馬云云呂氏春秋梁北有黎丘部有奇鬼焉喜效人之子姪兄弟之狀邑丈人有之市而醉歸者黎丘之鬼效其子之状扶而道苦之丈人我何故其子泣而觸地曰孽矣無此事也豈謂不慈哉我醉汝道苦邑人往可問也六父信之曰譖是必夫奇鬼也我固聞之矣明日端復飲於市欲遇而刺殺之明旦之市而醉其真子恐其父之不能反也遂遊迎之丈人望其真子とて現狐狸比技而刺之丈人云この奇鬼のじれ皆非人とりべしとぞ現狐狸比人よ寢せても非人あり逆臣の隠謀も非人の所為也源平盛衰記卷四義經始終事の段よ此兒打笑テ云云加様ニ文盲ノ身ニテハ法師三成タリ共非人ニコワラメトテ云云志く人をなむと非人とりあり唐山

ゆくも罪人の族を貶し。惡姓を賜ひたり。三國の季子。吳の孫秀。晉の南頓公宗梁の豫章王綜。武陵王紀。隋の楊玄感。小みの人のあり。三國志。吳志。宗室傳。六孫匡傳。云。泰子秀。即子孫匡也。為前將軍夏口督。秀公室至親。握兵在外。皓。吳主。意不能平。建衡三年。皓遣何定。將五千人。至夏口。獵先。是民間食言。秀當見圖。而定遠。獵秀。遂驚夜將妻子親兵數百人奔晉。以秀為驃騎將軍。儀同三司。封會稽公。江表傳。云。皓大怒。追改秀姓。曰厲。晉書。列傳。汝南王亮傳。附云。宗即南頓侯。字延祚。元康中。封南頓縣侯。尋進爵為公。云云。感和初。御史中丞鍾雅。劾宗謀反。庾亮使右衛將軍趙胤。收之。宗以兵距戰。為胤所殺。貶其族。爲馬氏。宗。晋室宗親。司馬氏。故與為馬氏。梁書。列傳。豫章王綜傳。云。綜字世謙。高祖第二子也。天監三年。封豫章郡王。邑二千戶。五

年。云。普通六年。魏將元法僧。以彭城降。高祖乃令綜都督衆軍。鎮于彭城。與魏將安豐王元延明相持。高祖以連兵既久。慮有釁。生敕綜退。軍綜懼。南歸。則無因復與寶寅相見。乃與數騎。夜奔于延明。魏以為侍中太尉。高平公。丹陽王。邑七千戶。錢云。云。綜乃改名鑽。字德文。追為齊東昏服。斬衰。於是。有司奏削爵土。絕屬籍。改其姓。為惇氏。俄有詔。復之。其子直。為永新侯。邑千戶。同卷。武陵王紀。傳。云。紀字世詢。高祖第八子也。云。云。及太清中。侯景亂。紀乃僭號於蜀。改年曰天正。云云。將軍樊猛。獲紀及第三子圓滿。俱殺之。於破口。時年四十六。有司奏。請絕其屬籍。世祖許之。賜姓。饗餐氏。隋書。列傳。第三十五。楊玄感傳。云。楊玄感云。云。諸弟並具。皇孫公卿。請改玄感姓。為皇氏。詔可之。文甚多。不勝。之他。南宋竟陵王誕。有

罪。殿族為留氏。とひゆり。宋書竟陵王誕傳より。是う。この類唐より。
 なれど。餘ハ數るよ勝べむか。天朝ももこのの故事よ擬一王ひ。般くん。
 が。是く東鑑。文治二年閏七月條云。義經已為叛逆人者亦義經
 者。與履三位中將殿。良經。依_テ為同名。被改義行。之由云云。同年
 年十一月五日條云。義行于今不出来。云云。大夫屬入道申云。義行
 者。其訓能行也。能隱之義也。故于今不獲之歟。如此事尤可
 思。字訓可憚。同音依之猶可為。義經之由。被申。提政家同年
 十九日條云。義經亦被改義頭。あく惡名を賜ひ。やくわく。當時
 提政家の公子との名。同訓。改らむ。又云。義經の名が
 出处を考る。佛書より。やうやくある。欽、維摩詰經。法供養品曰。依
 於智。不依識。依_テ義經。不依_テ不_テ。義經注。肇曰。佛所說經自

有義肯分明盡然易了者。云云。義經の乳名を遮那王とひく。遮那
 亦梵書より。やく。平治物語より。義經竊鞍馬を去く。陸奥へ趣む。
 十六歳のとむ。初。東光坊阿闍梨蓮忍が弟子。禪林坊阿闍梨覺日が行童
 き。右から經文をとく。その祖考。八幡殿頭殿の諱。義の字を取る。やく
 熟字かねども。みづちあう名のまづかや然ぞ。當時法師を憑く。潛ふ熟字を
 指す。平治物語下。牛若奥州下向の段より。深掘三郎光重。参考。六源仲
 子。陵助。頼重云云。早御元服候。ケルヤ。御名ハ何ト問。奉レバ。烏帽子親モ
 ナケバ。手ヅカラ源九郎義經トコソ。名乗侍ト答。テ打連給テ云云。おハ无益の
 辨れども。筆の次よちく。稱呼謬為罪人。本朝文粹卷三。意見
 延喜十四年四月廿八日。從四位上。行式部大輔。三善朝臣
 清行意見封事。十二箇條の第四條より。罪人伴家持。越前國云
 云。山城國云云。河内國。茨田。淡川。兩郡。田五十五町。以充生

徒食料號曰勸學田てふ議あり。この時家持卿を罪人と唱へられあらうね
ぐくし續紀卅・桓武紀は因るやん紀曰。延暦四年八月庚寅中
納言從三位大伴宿禰家持死略。家持天平十七年云云寶
龜十一年拜參議歷左右大弁尋授從三位坐氷上川繼反
事免出為陸奥國按察使居無幾拜中納言春宮大夫如故
死後二十餘日其屍未葬大伴繼人竹良等殺種継事發覺
下獄案驗之事連家持等由是追除名其息永主等並處流
焉。されば當時家持父子の罪人も又ハ論がれかくて又残缺後紀十三・桓
武紀曰。大同元年三月己卯上病大漸弥留辛巳勅縁延暦
四年事配流之輩先已放還今有所思不論存亡宜叙本位
復大伴宿禰家持從三位藤原朝臣小依從四位下大伴宿
祢繼入紀朝臣白麻呂正五位上大伴宿禰真麻呂大伴宿

祢永主從五位下林宿禰稻麻呂外從五位下家持卿死後
復本かれバ家持卿父子既にその赦免の日本位復されよう。延喜十四年よ
り百餘年と歷りようそ尚罪人伴家持と貶へる善相公千愚の夫ハ
ゆゑ余嘗續日本紀及萬葉集より家持卿の人となりと想像した
文華餘りわく心術云々かくさうなども當時この卿微り也。誰々詠歌の古
風を貽へく萬葉集を今は傳へん余との歌書と繙く毎ふこれらのみを念へよう
為ふ寃を雪ふのと顧ふゆくべハ天朝の書籍刊行のと化れ。六史ありと云ふ
ゆく官庫よ祕らまく披閲よ容易はくもあらず後世亦後紀のと見ぐく
鳥有ふ屬せても近日殘壁あくられくとの印平得難うべ是亦泰平の餘
澤あり仰くべく驩ぶべ。不祥の名ハよ少からずもあらどと酷くと知りゆ
村岡悪人あり類聚國史八十七・桓武天皇延暦十七年二月壬
子朔美濃國人村岡連惡人配流淡路國以停留群盜侵犯
甲二

百姓也。この悪人も、惡名と賜ひてやうあらざる欲かづくから名前あらば、その謫罰名詮自性かづく。保元建保の間、惡左府、惡七別當。源為朝惡右衛門督、惡源太、惡七兵衛、惡禪師アリとみづく。如此名告もづく。時人ハシムの暴惡非義を憎み、惡字を被カハ。又天正中よ、赤井惡右衛門あり。そと自稱アリ。又按、源義平ヒロタケの外よ、惡源太と呼ル。武士あり。江濃記よ、土岐氏の子を記せ。段ハシ、伯耆十郎賴藤ヨリフヂ、正慶中、賴藤弟、惡源太、賴遠ヨリトオ、數度高名比類ナシ。オゴリノアマリ。康永元院ノ御所ノ御幸ニ參會、狼藉ラウゼキシテ身ヲ失ヒシカハ。其弟周崔坊入道、賴明ニ美濃ノ守護ヲ給ル。取父祖片名以名子孫事アヒト延喜天曆の年間より、その崩モリるをさう。あともども藤氏よ。時平、兼平、忠平、仲平の兄弟。兄弟との名よ。かづく平字を命玉へ。父祖の片名と取玉ひ。や々ある。平家ゆき。貞盛、繁盛あり。こゝも兄弟。圓融花山の光時ヒカルトキ、源氏よ。滿仲、滿季、滿快、滿重。是も亦兄弟。余後、賴信、賴義、義家、義親、平家ゆき。正度、正衡、正盛、忠盛。

至リく父祖の片名を取ると恒ヒカル。唐山カムイも、父祖の名を嗣スル。稀スル。あの土アリのぞくやをひく。語ハ日知錄卷、廿三よ。文多タラれば載スル。本書就クく。かづく。ちくへども、よよ人の弟子アリ。その師の片名を取ル。ちのが名とル。或シ、その師の名號アリを受フ。ゆくハ和漢ハジカよ所見スル。按、文徳實錄卷、嘉祥三年五月丙戌、葬嚴清涼殿、安置金光明經、地藏經、各一部、及新造地藏菩薩一軀、屈請百僧修先皇七七日、御齊會解坐ハシメ之後云。是日有制ル。爲諸名神アリ。令度ドセ七十人、各爲名神アリ。發願誓念スル。其得度者アリ。皆以神字アリ。被於名首アリ。日本紀略アリ。條院トキエヨ上。永延元年丁亥アリ。九月廿五日乙酉アリ。於真言院童子十五人。剃頭カミツコ令受戒スル。名字付諸社片字來カタジラ。廿七日可被奉佛舍利使アリ。之故也アリ。淨土宗の誓字アリ。日蓮宗の日字アリ。れらを鑑觴カクシヤウとアリ。又并移シフく巫醫百工及文人墨客アリ。各之代師の名號アリ。一字アリ。名アリ。受フ。

カウベーの
譯名之制

1

C
せ
ト

カリベー。諱名之制。主と六史よ放る。書紀。廿。孝德天皇の大化二年八月
癸酉の詔より。あすれどもこの御宇。かく最も嚴密の制度をうまくす。アハ。
續紀。六。元明天皇の和銅七年六月己巳。若帶日子姓。為觸國諱。成務改
因居地賜之とす。されど名を諱の下。めやさあり。かくそく桓武天皇の延暦
四年五月丁酉。續紀。卅八。平城天皇の大同元年七月戊戌。嵯峨天皇の大同
四年九月乙巳。淳和天皇の弘仁十四年四月壬子。平城以下。仁明
天皇の天長十年七月癸巳。續後紀。二。數朝との制度をうすく上の御名及
先帝の御諱よ觸る。あひ。百官の姓氏。諸國の郡縣。及人民の姓名を改易
きを玉ひよ。抑平城の朝。元明のち。あひ。稍漢学闡。一。あひ。のよりもぞ
漢法よ做せ玉ひよ。仁明のえん時よ贈太政
大臣橘。朝臣清友公。嵯義天皇。皇后橘。朝臣嘉智子。父仁明天皇。外祖父。仁
玉ひよ。左京人。左馬寮。權。

大允、清友、宿禰真岡、散位同姓魚引等賜姓笠品宿祢非其願也。公家避太政大臣橘氏之名耳。同書九承和七年十一月辛巳勅橘戶蠻橘橘連伴橘連橘守橘等六姓與橘朝臣相涉。宜賜椿戶蠻椿椿連伴椿連椿守椿自餘以橘字為姓之類亦以椿換之。此れより唐山也。名を諱ゆハ春秋左氏傳桓公六年九月その化比史よりも多くをえれども名ハ諱ども姓は觸ども諱ども。况至尊その外戚の為よ譯玉ゆリハ和漢よ例あべくもあべく現承和の朝廷ハ外戚を愛敬あらまふとの殊更あらず。されば清友公の父奈良麻呂宿祢諸元嫡子ハ孝謙の御宇天平宝字。は元年七月よ刑せられまつても承和十年八月辛未よ後三位大納言を贈らむ。十四年十月丁酉よ太政大臣正一位を贈られ。詔曰云々。見續後紀十三十七橘氏の榮爵からしきび後くまでも源平藤よ推かれてて高貴の四姓といひあべ。又按もよ律第賊盜律曰凡恐喝取人財物

者、云云、展轉傳言而受財者皆為徒坐疏曰、假如甲遣乙景傳、言於丁恐喝取物五端甲合徒一年半乙景各徒一年是云云、景ハ丙へ唐律より景に作も。世祖の諱を避ひて天朝より丙字を諱ハ理也。あともども當時の儒官ある心つぎ一かん是諱ぞしく諱ト似る。世ノ字より代ふ。代ノ字よりてセドも。こもよかねド唐の太宗の諱成世民とひすよ。唐朝も世ノ字を諱と甚一から。生代の論ハ東屋の秉燭偶談もむか。天朝の儒官及官僧唐の文書は做ひ。世と書へたをも謬く。代字をりて換る多カ。流俗こもよ浸染し。今より改められも偏る假字と名く。かべてよと讀バ論ナリ。先祖代々よりがくは。理義を稱せてもわづば世と代ともとの義を於てかく。家督の子。家督の孫。その父祖より嗣を世とひ。兄の跡を弟が繼或ハ親族の子が繼ぎ。又他姓の子が代り立を代とひ。世の差別ハ神皇正統紀より。敵もれ外乎。亦多く有る。今よりそハ俗より從ふ。

論れども見在更くとすとより。江家次第。卷ノ十親王宣旨事條下云勘申御名事。云云二字不偏諱及唐偏諱抄云。世代民人依近大宗諱也。とく。異朝の沙汰あり。國人の世ノ字より換る。代をす。手兒名ナコハ萬葉集第六山部赤人の歌第九高橋連虫麻呂歌より。勝牡鹿郡名即モ又作間。の一女子。前輩の説より。手兒名ハ東國の方言女子をりてつまど。證文。按。手兒名ハその女子比名也。類聚國史百九職官部弘仁五年正月丁卯の叙位。吉弥侯部主。僅奈ヒト。者をも。古と僅と通す。かれハ手兒名主。僅名ハ同名とす。愚按。の如く。然ど。その義ハ。考詳。手兒名。戦國武士。次。取官名。夏。世人のち。就中甚。考新編東園記。卷ノ二。曰。葦名盛隆。其家臣保土原江南が嫡子何某十六歳ニテ。武功アリシカバ。大和守ト名ツク。翌年又比類ナキ勵アリ。

方バ。山城守ト稱セラル。コノ保土原ハ。天正十年。人取橋ノ合戰ニ。它豆ノ家臣。濱尾十郎ニ討ル。保土原濱尾。共二十八歳ナリ。とて。受領を改名とす。ゆふ。いとぞ。まく戦國の武士也。僭上からざる如好り一とわん。又よく似る。あり。東國太平記よをき。篠塚伊賀守。栗生美濃守ハ。初蒲生氏郷より仕え。され。栗生篠塚子孫也。栗生美濃守ハ。初蒲生氏郷より仕え。され。姓名。寺村半左衛門と云ひ。天正十五年四月朔日。筑前國。岩石の城攻め。坂小平後改名蒲生源。左衛門成郷。と共に。城の一番衆也。栗生美濃守と改名也。と同書卷十。よして。こどもとす。推せば。後の篠塚伊賀守也。昔也。篠塚が子孫やをあく。只その武勇を慕ひ。よす。如此名告も。りのやうん。昔漢の司馬相如ハ。蘭相如が人と並びと景慕して。相如と名つた。と云ふ。この類の名。和漢は多くあれど。所縁かなり。漫々古人の姓氏を冒し。との官名え。受継。戦國衰弱の俗よをき。この後。技藝未熟ゆゑ。とく名をやれん。

る。由來古人の姓名を冒し。或ハ古人の名號をほぐり。栗生篠塚が亞流也。その技上達も。道の一祖やをかくやくべ。以下係殿と稱す。撰政家よ限ることあれども。僭しく良賤相呼。と今も昔もかづぬ。様と唱ると。専かく。よす。殿とりば。不敬。とそひのちもと。昔ハ至尊。その亡臣を愛顧して。殿と呼。セ玉ゆ。あり。愚管鈔卷四。云。白河院ハ。つよ能信を。故春宮大夫殿矣。せをも。身へかく運もあり。や。仰られ。必く殿字とつむ。仰られ。やんと。かく。と。後朱雀院病。かく。玉ひ。と。後冷泉院。御讓位。あらざ。能信執。あら。後三條院と。春宮。よか。ある。されば。かべ。白河院ハ。後三條院の脚子。よどり。御母ハ。贈皇太后茂子能信卿。御堂。閑白道長公。第二の女。かく。顧交武。日知錄卷四。人君。称。大夫。字。子正。二位。權大納言。卷廿二。人主。呼。入臣。字。水の考証あり。亦考。冬。大樹ハ。鎌倉及京都將軍を稱す。あく。とく。物よ書。と。れども。余へあらぬ。つ。大樹ハ。後漢の馮異が故事。馮異傳。曰。秀。光武。部分吏卒。各隸諸

軍士皆言願屬大樹將軍。大樹將軍偏將偏將小。馮異也。為人謙退不伐。敕吏士非交戰受敵。常行諸營之後。每所止舍。諸將並論功異常獨屏大樹下。故軍中號曰大樹將軍。至是馮異ハ偏將偏將。鎌倉京都の將軍ハ連帥連帥。漢朝偏將の號をり。我連帥連帥。大柱直大柱。書紀推古紀曰。二十八年冬十月。號の相似相似。大柱直大柱。書紀推古紀曰。二十八年冬十月。以砂礫葺檜限陵上。則城外積土成山。乃每氏科之。建大柱於土山時。倭漢坂上。直樹柱勝之。大高故時人號之曰大柱。直又一个相似相似號あり。清の張廷玉張廷玉が所云木下人足木下人足。明史傳曰。信長偶出。獵遇一人臥樹下。驚起衝突。執而結之。自言為平秀吉。薩摩州之人。奴雄健蹠捷有口辯。信長悦之。令牧馬。名曰木下人。又謬傳謬傳。保ると云。大樹將軍良匹良匹。○事の錯誤錯誤。

すうづ誇貌誇貌。コノモノと。自他の不然不然。ヲコガマキとりへ常語常語。されど。古誦古誦。とひの罕罕。今昔物語今昔物語。卷十二。古今著聞集古今著聞集。卷之八。第六條。古今著聞集。卷之八。及下學集下學集。能藝能藝。嗚呼者嗚呼者と書く。書言字考人倫人倫。やハ。西京賦西京賦。を引く。徑庭者徑庭者と書く。和訓類林類林。遠事の徑庭徑庭。文選文選。遠己己。志志。此訓始此訓始見于此。と云。按もよ。文選賦。張衡張衡。西京賦賦。曰。望辟寐辟寐。以徑庭徑庭。眇不知其所。反とりふ是是。徑庭徑庭。よ鳴呼の義耶。克和訓和訓。を推當推當。人人。れども是ハ猶可猶可。呂氏春秋安死篇安死篇。徑庭徑庭。安死篇安死篇。曰。曾子孫曾子孫。有喪。孔子孔子。往吊吊之。入門而左。從客也。主人以以。璠璠。收收。孔子孔子。徑庭徑庭。而趨趨。歷級歷級。而上。曰。以以。宝玉玉。收玉。譬譬之。猶暴戩暴戩。中原中原也。雖然雖然。以救救過過也。也。蜀人蜀人。見人物之可許可許者。則曰。嗚呼嗚呼。可鄙可鄙者。則曰。噫嘻噫嘻。嗚呼嗚呼者。此間此間。書古來ヨリ散見ス。俗言。イキスギモモ者。ト云ハ。噫嘻噫嘻。過ナラムカ見下。之卷。と云。之卷。不及の義義。往往。過過。かべ。嗚呼嗚呼も亦是是。あざあざ。按もよ。二代實錄二代實錄。陽成陽成。曰。元慶四年秋七月廿九日辛酉。

歌人國。墨子
篇下作。論
沐國。魯同編。
作啖人之國。

御仁壽屢覽相撲左右近衛府云云右近衛內藏富継長尾
米継善散樂令人大咲所謂鴻許人近之矣ヲコノモノもやくあよ
名をく鷗辭と書く鳥辭ハ地の名也後漢書列傳第十六南蠻傳曰交
趾之西有敢入國生首子輒解而食之謂之宜弟味肯則以
遺其君君喜而賞其父取妻美則讓其兄今烏辭人是也と
之便足ヲコノモノの本文この土よりヲコノモノハ蠻夷の愚惡と譬喻セ
リ蜀人の嗚呼とも殺ドヤビツの嗚呼と書く假借アリ。

第三十人事 宋陳彭年綽號

今俗妻妾の家政専かりを譏りて或ハ姐己とひ或ハ九尾狐とひと見似
たまふを唐山より宋元通鑑宋真宗紀曰天禧元年二月陳彭年
卒彭年敏給強記好儀制沿革刑名之學然性奸惰時號九
尾狐是號アリ此の九尾ふ狐ニ二種アリ山海經大荒東經曰大荒中云

云有青丘之國有狐九尾傳太平公則出白虎通封禪曰狐九
尾何狐死首丘不忘本也明安不忘危也必九尾者也九妃
得其所子孫繁息也於尾者何後當盛也文選論王褒四子
講德論曰昔文王應九尾狐而東夷歸周武王獲白魚而諸
侯同辭クスコトド九尾狐ハ並よ瑞獸也山海經南山又曰青丘之
山云云有獸焉其狀如狐而九尾傳即ナ九其音如嬰兒能食
人食者不蠱邪之氣或曰蠱蠱毒同書經云有獸焉其狀如狐而九尾九首虎爪有シゲテ名曰蠱姪リギテト龍蛭其音
如嬰兒是食人トシガ九尾狐ハ並よ惡獸也宋朝の人當時陳彭年小
譬喻ちきれいの狐也ん又國俗之所云九尾狐ハ三國惡狐傳一名三國妖婦傳
云草子物語ありかう彼惡狐傳ハ原本何人の作かれてあらぬ事也と寫本
多く行き能樂あり殺生石也今ハ何をうつせば天竺也ハ斑足太子比塚の

神。大唐少くハ幽王の后襫姫と現ド。我朝をも。鳥羽院の玉藻前と云ひて。と謡カ。と父母あり。次あゆう作りぬ。かれども云ひ。謡曲の作者は始る者。ある。序文。物語あり。何と云ひ。下學集。態藝。犬追物之下。云。肯西域有。班足王。其夫人惡虐過人。勸王取千人之首。其後出生支那國為周幽王后。其名曰襫姫。滅國惑人死後出生于日本。近衛院御宇歸玉藻前。傍入無極。後化成白狐害人。惟多時俗欲驅之。先射走犬。以試其射騎。白狐知之化而威石。飛禽走獸當其殺氣者莫不立斃。故謂之殺生石。于今在下野那須原也。犬追物始于此矣。但聽之古老之口號雖不知本說且載之而已。と云。下學集ハ文安元年編集也。このより東麓被納何人。自序又見也。又安元年ヨリ至文政二年。この時既に故老の口碑よりと云。物語のゆゑると推知ベ。又鎌倉志卷四よ載られ。海藏寺。谷山の閑山源翁。

禪師傳。康治帝即近衛院の寵妃。玉藻前と云ひ。也。皆當時の小説を取も。或説玉藻前。物語ハ。時の人。美福門院譲得子。鳥羽院皇后。を讒。あうさん。その娘子。近衛院の寵妃。玉藻前と云ひ。作。也。と云。か。何ふ本づく。や。保元の内乱ハ。と云。女謁内奏。起。これより。彼門院を傾け。す。當時も。そをあつり。あとちり。まことに。三國志。狼傳ハ。おとく。後人の。成。も。り。ゆ。ゆく。傳。一草子。物語。ハ。あ。ば。下學集。及能樂。絶生石。班足太子の。仁王經。佛説。仁王護國般若波羅蜜經。護國品第五曰。尔時佛告大王。昔有天羅國。有一太子。欲登王位。一名班足太子。爲外道羅陀師。受教。應取千王。萬里。即得一王。名曰普明王。其普明王。白斑足王。言願聽。一日。飲食沙門頂禮。三寶。其班足王許之一。日。時普明王。即依。

過去七佛法請百法師敷百高座下日二時講說般若波羅蜜八千億偈竟其第一法師為普明王說偈言云云尔時法師說此偈已時普明王眷屬得法眼空王自證得虛空等定聞法悟解還至天羅國斑足王所衆中即告九百九十九王言就命時到人人皆應誦過去七佛仁王問般若波羅蜜中偈句時斑足王問諸王言皆誦何法時普明王即以上偈答王王聞是法得空三昧九百九十九王亦聞法已皆證三空門定時斑足王極大歡喜告諸王言我為外道邪師所誤非君等過汝可還本國各各請法師講說般若波羅蜜名味句時斑足王以國付弟出家為道證無生法忍如十王地中說五千國王常誦是經現世生報大王十六大國王脩護國之法法應如是とぞうりやこの經文中は狐妖の事ハヤテ褒姒ハ史記四

周本紀はをさう人の多き事あらむ且文多々載せ。褒姒ハ周屬王の時續小藏す。神龍の漦を發れ。その神龍の精液也。即漦化て玄龜もあらず。王宮に童女。これに遭ふ孕た。との子ハ節褒姒也。とて。このより國語六・鄭語よどる。太史公取く。史記よ收ゆ。顛未だの如く。亦次物語あれ。有り。玉藻。前の物語の作者國語及史記より褒姒と。仁王經より斑足王の事を撮合して。狐妖の怪談成り。この物語を。周の褒姒と。殷の妲己も作り。後人の所為ゆ。通俗武王軍談より褒姒べ。原彼武王軍談より武王克殷王天下あざめの事。封神演義の譯文取。鍾伯敬が批評せ。封神演義ハ全部十六巻。題目九十九回。紂王女媧宮進香とある起り。周天子分封列國とある盡。康熙乙亥年月長洲褚人獲學稼號。四書序あり。この演義小説ハ九尾の狐形を變へ。妲己もあると。すと面白く作説す。妲己が。史記卷殷本紀。卷四。ある。ちよどり狐妖の事あらず。唯王褒が四子講德論。文王應九尾狐而

東夷歸周とある。この瑞獸をりく彼惡狐前より引く。山海經の文考也。作りかえ周文の祥瑞を
殷紂の妖孽えうじやくよどりてあり。一部の怪談成りてあつても通俗武王軍談の原本ハ亦是
一本へ譬へ水滸傳と金瓶梅の如くあくまくせんこうとまれかくもと國俗の口碑よ傳へト玉藻前
怪談と彼封神演義と新舊先後ありとべどその作意和漢暗合せり後人武王軍
談よ縁りそ褒姒を姐已のうきよ作りをし。あづくよき。抑九尾狐のす。前板慈石雜
志よりひハ疎漏そろて寔よ無益の辨あきども童子の夜話を資んとくがくひく
あくよ考正に好事の癖くせ次好事の癖くせあり。

第三十一人專

久米仙 賽吉野山
附仙

久米仙ハ布を浣ふ女子の素脛をうなぐ。墮落ぢどりふ。あもいとゆり。小説なり。
先管見を集錄せ。扶桑略記。醍醐天皇之卷。曰。昌泰四年辛酉八月云。
云。天台山沙門陽勝。於大和國吉野郡堂原寺邊。飛行空中。元是云云。古老相傳。本朝往有三人。仙所謂大伴仙。安曇。

仙久米仙也。但久米仙飛後更落其造精舍在大和國高市
都奉鑄文六金銅藥師佛像。并日光月光像堂宇皆亡佛像
猶坐曠野之中。久米寺是也。今昔物語一卷廿四第五條云。今もむかし。
代との久米帝大和國高市郡みつう造宮みやをまつ。國内の夫を准そなへて。もの
役わくとくわく。ちゆゆよ夫との中なか。仙人せんじんとくわく。すがりすがり。行吏官の輩ともぐ。あわせく。
汝なお何なよう。かどを仙人せんじんとくわく。向むかへ。夫おの顔おほそえそい。このことく。久米くめとくわく。
さかの年。當國吉野郡龍門寺りゆうもんじより。法ぼをくわく。仰あおむ。空そらよ飛とり。有ある。
折たたき。吉野川のほとり。また女めのの美うつくしき。裾きぬをくわく。衣きぬをくわく。腰こし
ありとくわく。あらまひ。女めの前まへよくわく。則そとの女めの妻めのとくわく。今いまよくわく。うと
よりとくわく。便べんとくわく。とくわく。行吏官ぎょうりとくわく。とくわく。行吏官ぎょうりとくわく。
時の行法定ぎょうほう。定じょうとくわく。度ともくわく。が多多く。材木ざいもくとくわく。びようひよう。けりく飛と。

をとのす。、やあかう。まああく。極あくまのとがりあんとこ。よ。その後久米ひづの
道場にて食をもらふ。七日七夜初よ。八日とあります。俄は空より多く雷雨
もあふ。、おもあく。、その時よ。空をぞごくの材木。南の山邊の
杣より空を飛び。造営の所よ。あつあり。行吏官云々。元亨釋書。卷十八。
曰。久米仙者。和州上郡人。入深山學仙法。食松葉。薛荔。一旦
騰空飛過故里。一會婦人以足踏浣衣。其脛甚白。忽生染心。即
時墜落。漸喫煙火。復塵寰然。鄉黨契券當署。其名皆書前仙
某。今舊券之中。往往猶有手澤。悲然。以下文同。扶桑略記。これより後のものよ。又
久米仙の子を以もあも。おひだちあれば省略。右より三仙。大伴安曇。久米。各その姓氏。久米氏。朝臣直の三姓。新撰姓氏錄卷四。久米朝
臣。武内宿禰。孫稻目宿禰之後也。卷七。久米臣。抑本同祖天
足彦國押人命五世。孫大難波命之後也。卷十四。久米直神

龜命八世孫味日命之後也。今按天武紀有大來和名鈔國郡大和國高市
郡の御名又米也。久米仙この地名よりて名づけり。人勿れへばざれの虚空を飛べし。浣婦の
素脛とよき。墮落せりどふ。古俗の寓言也。何とかれ。この小説ハ萬葉集也。久米
禪師よりひじ來也。萬葉集第二。久米禪師。姓石川。郎女。時歌五首。
水薦莉信濃乃真弓吾引者宇真人佐備而不言常得言可聞。禪師
三薦莉信濃乃真弓不引為而弦作留行事乎知跡。言莫君二郎女
梓弓引者隨意依目友後心乎。知勝奴鴨郎女
梓弓都良緒取波氣引人者後心乎知人曾引禪師
東人之荷向芭乃荷之緒爾毛妹情爾衆爾家留香聞。禪師
あよ久米禪師とあり。久米仙は作りて石川郎女とあり。よりて布を浣ふ婦人と
なり。又その禪師を仙させし。大唐西域記卷五。羯若鞠闍國條下云。人
長壽時其王號梵授時有仙人居死陀伽河側接神入定經數

萬歲

一日

出定

寓目

河濱遊觀

林薄見

王諸文

相促嬉戲

欲

界愛

起染著

心生

詣華宮

云云

王諸文

相促嬉戲

欲

嬌女誘亂退失神通

嬌女寫其肩而還

城邑此他梵書仙人墮落

嬌女者多有

文甚多提要以錄焉同書卷二健

羅國條下亦云昔獨角仙人為

吉野川よ壁言バ萬葉集第

十又竹取翁逢九箇神女贖近神之罪歌

云云とあつよりく竹取物語を作爲せりが如く昔人曉らば受く筆を載るを雅

俗于今口實とて一書說大和國來目邑有芋洗芝昔久米仙見

女洗衣之處也どり半洗又作五

下地名ハ諸國より矣來目邑よ限る

乞也お詫よ因く詫を傳るのミ土俗の臆説

が多カノ諾樂の樂師寺の沙門景雲

日本靈異記より米仙の事

鬼もこの物語ハ萬葉集世よ流布セテ後ふ

作爲をあゞ。景成ハ孝謙天皇の朝の僧と

りもど靈異記下巻第十一。當帝姬阿倍天皇代云云とあはれ神護景雲す。対後の事也。和漢

神仙の事誣べるある様も物よあらず如くかしむや何とかバ。穆天子傳漢武

内傳より西王母ハ神女也。穆天子傳曰。吉日甲子天子賓于西王母執玄圭白璧

以見西王母獻錦組百疋組三百疋。西王母再拜受之

乙紹天子謁西王母于瑤池之上。西王母為天子謠曰。云云。漢武内傳曰。七月七

月上承華殿齋忽有一青鳥從西方來集殿前上問東方朔朔曰。此西王母

嬌女誘亂退失神通

嬌女寫其肩而還

城邑此他梵書仙人墮落

嬌女者多有文甚多提要以錄焉同書卷二健

羅國條下亦云昔獨角仙人為

吉野川よ壁言バ萬葉集第

十又竹取翁逢九箇神女贖近神之罪歌

云云とあつよりく竹取物語を作爲せりが如く昔人曉らば受く筆を載るを雅

俗于今口實とて一書說大和國來目邑有芋洗芝昔久米仙見

女洗衣之處也どり半洗又作五

下地名ハ諸國より矣來目邑よ限る

乞也お詫よ因く詫を傳るのミ土俗の臆説

が多カノ諾樂の樂師寺の沙門景雲

日本靈異記より米仙の事

鬼もこの物語ハ萬葉集世よ流布セテ後ふ

作爲をあゞ。景成ハ孝謙天皇の朝の僧と

りもど靈異記下巻第十一。當帝姬阿倍天皇代云云とあはれ神護景雲す。対後の事也。和漢

神仙の事誣べるある様も物よあらず如くかしむや何とかバ。穆天子傳漢武

内傳より西王母ハ神女也。穆天子傳曰。吉日甲子天子賓于西王母執玄圭白璧

以見西王母獻錦組百疋組三百疋。西王母再拜受之

乙紹天子謁西王母于瑤池之上。西王母為天子謠曰。云云。漢武内傳曰。七月七

月上承華殿齋忽有一青鳥從西方來集殿前上問東方朔朔曰。此西王母

來也。有頃王母至紫雲之輦。駕五色班龍。上殿。自設精饌。以柈盛桃七枚。帝食之。甘美。常云王母曰。此桃二十年一熟。實又南窓下有。人窺者。帝驚向祠。上母曰。是。我隣家小兒。東方朔性多滑稽。曾來偷桃子。此子皆為太上仙官。但務游戲。太上諭。斬使在人間並。提要。

神仙の事誣べるある様も物よあらず如くかしむや何とかバ。穆天子傳漢武内傳より西王母ハ神女也。穆天子傳曰。吉日甲子天子賓于西王母執玄圭白璧以見西王母獻錦組百疋組三百疋。西王母再拜受之。乙紹天子謁西王母于瑤池之上。西王母為天子謠曰。云云。漢武内傳曰。七月七月上承華殿齋忽有一青鳥從西方來集殿前上問東方朔朔曰。此西王母

亦これと載く神仙の巨擘とぞ。列仙全傳第一卷。西王母為第三位老子木公在其上。

西山曰。崑崙之丘云云。又西三百五十里曰玉山。是西王母所居也。西王母其狀如人。豹尾虎齒。而善嘯。蓬髮載勝。是司天之厲。及五殘。萬災屬也。戊戌。天之氣也。大荒西經亦云。炎火之山云云。有入載勝。虎齒豹尾也。處名曰。西王母。かれ。西王母ハ毛屬之國名也。爾雅釋地云。荆竹北。西王母。日下。謂之壁言。巴梁の任昉が述異記卷。よひ。鬼姑神。利。帝母神相似。說類卷六。癸辛雜識外集。亦載。て。又。多。邑宜以西南丹諸子母神。一名詞。卷六。癸辛雜識外集。亦載。て。又。多。邑宜以西南丹諸

靈中。穹崖絕谷。有獸。楚襄王。與義楚六帖。所云鬼利。帝母神相似。說類卷六。癸辛雜識外集。亦載。て。又。多。邑宜以西南丹諸

三

致死。吾ハ元来熊野山里の生れ也。年十八のころより父母ハ死ニ。親類皆死果て。
あ死をきまふ不圖山中はまけ入り遂は故郷還らむと。まが夥の年を歷え
何を食はばと問へ。鳥はすれ鹿猿はまと獲るよ隨ひく食ひつゝも事で存命
あり。まどりく、塩氣を嘗じハ露命と較然たゞかく。やまと火用竭セハ久の如き。
人の山は入るよめく。それともものと不凡才木難より山に入ることを。山は日數を経
もあれ。いのく所、鹽稽あす。そぞ些づ集るよ二合あまうよ及べ。鹽を紙よ捻まそ
そぞちく。難ひる。じよあらゆき。謝もと大うとせば。初もそれうめのむひと與
あらゆよむひく。汝をうだ鹽を獲る。じよ嘗盡毛を向ふ。四五十年ハわんと
答ふ。とぶ中よ。あらぬらめあひて。汝がち。あく山は今ふ。じよの光時ど。年號ハ何と
ひ。審よ告よとり。年曆時日ハ忘れず。只嘉吉と歎。又文安とうい号あり。一を
すくねども。それまゝ夢の如くと答ふ。まごとみ比ハ世間騒一死をさく。當國ゆく
戦ひあつ。如此く。のまハ生もあらず歎。叮嚀しが

ゆきよ山より入りて里へ出でまゝり。人間のよひあらびより現無智文盲のとて
 カミト。既にすく定をかげ、只鹽を乞得ト。其の外ふる事なかれ。又山をく
 走り去る事ハ壬申の年より。大和某領の教導荒井學士公廉。教導の為。
 同國の村落を巡り。一日彼異人は邂逅セテ樵夫とされど。笑ひとも。浪華亨一友人。
 又荒井氏よこまを度す。かねて年の一月。余がゐより。ゆきよ古人の筆を載る。
 地仙をくづのハ。この類よ過ぐべ。巖居水飲禽獸と俱り。幾百年を歷くと
 云ふも亦何の益あらず。吾兄羅文。瀧澤興甫。俗稱臺右衛門。歸東岡
 十年。戊午八月十二日。從時一年四十。葬于江井。遺稿曰。娶妻無
 戶小石川。若荷谷。清水山。深光寺。先塋之。則
 後者。生涯此同獨居。學仙入山者。未死如不紀鬼。又曰。老而
 不足談故。依之造壽富而不能施。人是以有錢との言や味ひ也。
 前より録セ。奇譚をくづ。廣く神仙の説を破らむ。

玄同放言卷之三上本

集五終

